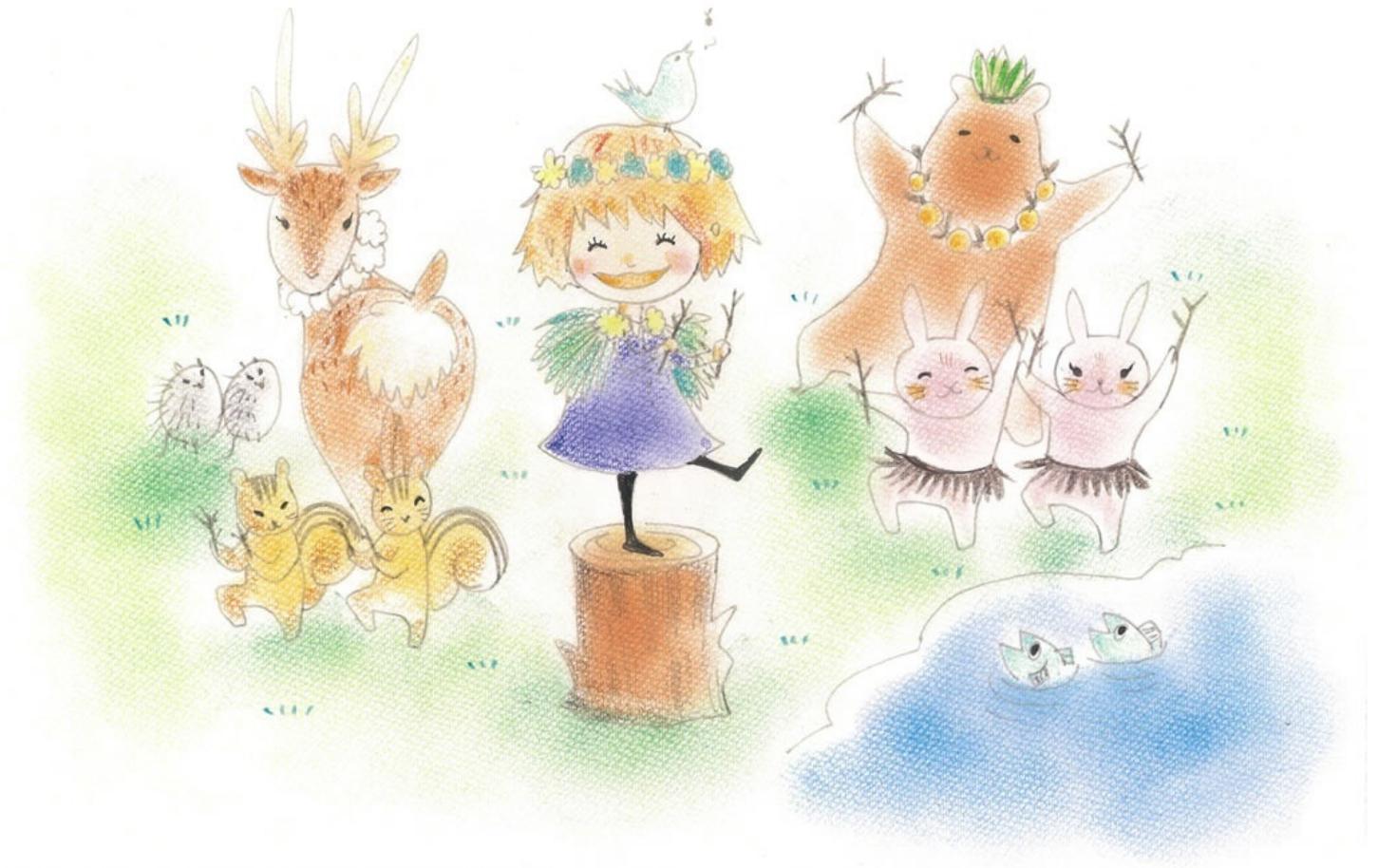


みつけた
「だいじ」なもの



中村 順子



ある森に女の子がいました。

1日中森の仲間達と遊びっぱなしの日々でした。



ある日、楽しい毎日の中で急に不安になりました。
いつも遊んでいた森の仲間が、急に石になり辺りが暗くなりました。



マジョが突然現れました。

「おまえはこの森から出ていけ」と
女の子をどこか遠くに飛ばされてしまいました。



女の子が目を覚ますと、辺りはキミョウな世界。
見た事のない生き物が急がしそうに動いています。
どこからかイイニオイ。



そこにはウィンナー屋さんがありました。

「そちらのおいしそうな食べ物下さいな」と手を出しました。

「お嬢さん。これはリングがないともらえないよ」横から茶色の生き物が言いました。



「どうすれば、このリングはもらえるの？」

「このお店で働かせてもらいなよ。そうすればわかるさ。ヒヒヒ」と茶色の生き物。

そこで働く事になりましたが「なんて大変な作業なのかしら・・・」



女の子はたくさん働いて、「リング」をもらいました。

その「リング」で町中のほしいものを「買う」事ができました。

「働くのは大変だけど、ほしいものが手に入るって何て楽しい事なのかしら」とごきげん。



女の子はキレイにしてほしいととこやに行きました。



女の子は「わおん！何て事するの！？髪が台無しよ！」

「クスクス。お嬢さんには、その髪型が似合ってるよ」

「その洋服も図書館の妖精さんの方が似合うよ」と言われ、茶色の生き物と一緒に会いにいきました。

「良かったら着てください」



着いたのは古びた図書館。そこには真っ白で美しい妖精が本を読んでいた。

「この服は、あなたの方が似合うからと言われてきました」

「良かったら着てください」と女の子は言いました。

「お洋服ありがとう」



服を着た妖精は、とてもキレイでした。

妖精は体がとても体が弱く、ずっとベッドで過ごしていました。

「お洋服ありがとう。そんな優しいあなたに1つお願いしてもよいかしら」



そこには水不足で「お花」が枯れて困っている、もじゃ男爵がいました。

「リングがたくさんあれば、雨を降らす事が出来るのになぁ・・・」
女の子は「私がリング持ってるよ。どうすればいいの？」

「赤鬼さまが雨を降らしてくれるよ。このハシゴの上にいるよ」ともじゃ男爵は言いました。



そこにいたのは大きな赤鬼。

「赤鬼さんお願い！！リングを全部あげるから雨を降らしてください」
パイプをふかせながら「毎度あり。」と一言言って重い体を持ち上げました。

「わーいわーい！」



「ドンドンドン！」空からたくさんの雨が降ってきました。
キレイな色とりどりの『お花』が咲きました。
モジャ男爵も女の子大喜び。茶色の生き物をニヤリ。



『お花屋さん』は大人気。

この『お花』をもらって、みんな笑顔になりました。

リングは全部なくなったけど、みんなの笑顔が自分も嬉しい。

「これ、あげます」



「とても助かりました。これ、あげます」
と女の子にツボミを差し出しました。
「わあ、うれしいわ。ありがとう。」

「どうしたら森に帰れるのかしら。」



みんな喜ぶ姿を見ながら、女の子はふとさびしくなりました。

「どうしたら また森に帰れるのかしら。もう皆にずっと会えないのかな」
いろいろな事を思い出して、元気がなくなってしまいました。



「おやおや。雨にぬれてしまうよお嬢さん」
見上げるとそこには、いつもの茶色の生き物がいました。
「君は会った時よりだいぶ大人になったね。生きるって変化していく事なんだ」
「そしてボクもね。」



茶色の生き物がキラキラと光り出しました。
何故かその変化していく姿に女の子は胸がワクワクしました。



茶色の生き物の背中にのって『森』に旅たちました。

「あなたには、色々と感謝する事がいっぱいだよ。本当にありがとう」

「本当に大事なものは、このキミヨウな世界で学んだ事と、その感謝の気持ち忘れない事だよ」

「そうすると君と同じだと思ってた日々は、自分しだけで、つねに学ぶ事と感謝できる事でいっぱいな事に気づくよ」

2人は長い真っ青な空を旅しました。



まっていたのは森の仲間達と、濃いスープパパと魔女の帽子をもったママ。

「おかえりさない」とみんなで女の子にいました。

女の子はとてうれしくなりました。



-END-

女の子はキミヨウな世界で学んだ事と
みんなへの感謝の気持ちを忘れる事はありませんでした。
同じ毎日ですが日々成長していきました。